平成23年1月発行
第91号

京大病院広報

KYOTO UNIVERSITY HOSPITAL NEWS

院内で「季節のイベント」を実施しました

小児科の「ハロウィンファンタジー」

ウェルネスエリアにクリスマスツリーが登場

本文9、10ページをご覧ください

CONTENTS

1 トップ記事「積貞棟の有料個室をご紹介します」……2
ベッドコントロールセンター 助教／加藤 源太　助教／田村 寛
2 新しい外来の医師紹介……3
3 最先端医療シリーズ……3
「下肢切断を回避する可能性を秘めた再生医療 ―血管新生療法―」
探索医療センター 開発部・心臓血管外科 准教授／丸井 晃
4 院内講演会の紹介……4
「結核の院内感染予防策について」
感染制御部　副部長／高倉 俊二
「多剤耐性グラム陰性桿菌の現状と対策について」
感染制御部　副部長／高倉 俊二
5 読者より……6
「京都博愛会病院の紹介」
社会福祉法人 京都博愛会 京都博愛会病院 院長／金 盛彦
6 トピックス……7
7 名物職員紹介……12
8 栄誉……13
9 各科・部からのメッセージ……14

京大病院の基本理念

(1)患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する。
(2)新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する。
(3)専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する。

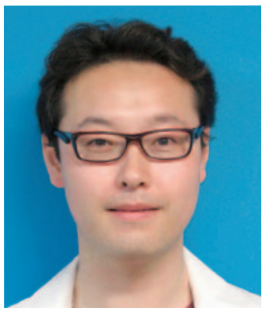
発行 京都大学医学部附属病院広報編集委員会
〒606-8507　京都市左京区聖護院川原町54
[FAX] 075-751-6151　[URL]http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp

ご意見、ご感想をお待ちしております。また、原稿の投稿も歓迎いたします。

1 トップ記事

積貞棟の有料個室をご紹介します

◆ベッドコントロールセンター　助教／加藤（かとう） 源太（げんた）　助教／田村（たむら） 寛（ひろし）


加藤 助教

田村 助教

2010年５月のオープン以来ご好評いただいている積貞棟ですが、その目玉のひとつとして、これまでの京大病院にはない、さまざまなタイプの有料個室が設けられました。がん治療を受けておられる患者さんにゆとりあるきめ細かなサービスを受けていただこうという思いが、これらのお部屋には込められています。おかげさまで、オープン以来予想を上回る患者さんにご利用いただき、たいへん感謝しております。ご愛顧に御礼申し上げますとともに、この場をお借りしてこれら有料個室のご説明をさせていただきます。個室の利用をご検討いただいている皆様への一助になれば幸いです。

特別個室SS，SA

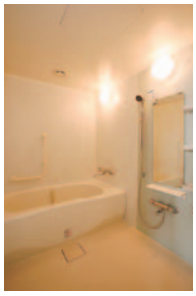
８階（SS: 120,000円／１日※）、６階（SA: 97,000円／１日※）にそれぞれ１室ご用意いたしました。広々とした病室が確保され、南向きの窓から京都市内を一望することができます。病室のほかに応接室やキッチン、付添者専用の控室もご用意しており、控室にも専用のキッチン、トイレが完備されています。病室入口ではモニター認証によるオートロックシステムを採用しており、患者さんのセキュリティにも配慮しております。また、病室や応接室には大型テレビやFAXなどを備えており、職務をお持ちの皆様をサポートいたします。

市街を一望できる病室

広々とした応接室

モニター認証オートロック

控室も完備



清潔なバス・トイレ

特別個室SB

２階（SB: 31,000円／１日※）に４室ご用意しております。病室内にバス、トイレ、キッチン、応接セットをまとめました。患者さんのみならず、お見舞いの方が来られても狭さを感じない広さを確保してあります。

使いやすく広い病室

キッチン・バス・トイレ完備

一般有料個室

各フロアにご用意しております。いずれのお部屋も、新しい設備とコンパクトにまとめられたレイアウトで居室性の向上を実現いたしました。お部屋のグレードにより、シャワーのついているお部屋とついていないお部屋がございます。

明るい病室

機能的なシャワー室

個室のご利用を希望される場合

特別個室は、原則としてどなたでもご利用いただけます。入院申し込みをされます際や、外来担当医が入院を決定する際に、患者さんからご希望いただければ出来る限り対応いたします。どうぞお気軽に担当医、入院案内の担当者にお声を掛けて下さい。**ただし、空床状況や患者さんの病状によってはご希望に添えない場合もございます。この点をご了承いただきますよう、お願いいたします。**

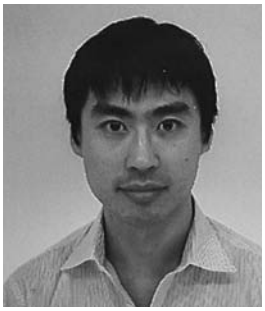
一般有料個室につきましては、原則としてがん治療を中心とした積貞棟の診療科の患者さんが対象となっております。

これからの課題

ハード面では充実させることのできたこれら有料個室ではありますが、ソフト面でのサービスは、とくに特別個室においてはまだまだ不十分なところがあると自覚しております。ご利用された患者さんから、しばしばご意見を頂戴することもございます。こうしたご意見や、特別個室の運用に実績のある他病院のノウハウを参考にしながら、プライバシーや充実したアメニティを求められる患者さんのニーズを十分に踏まえ、これら有料個室のグレードを質・量ともにさらに高めてまいります。みなさまのご利用を心よりお待ち申し上げます。

※１日当たりの料金のため、１泊入院の場合は２日分、２泊入院の場合は３日分の料金がかかります。

2 新しい外来の医師紹介



診療科／**免疫・膠原病内科**

氏名／**吉藤（よしふじ） 元（はじめ）　助教**

8月に免疫・膠原病内科の助教として赴任しました吉藤 元です。よろしくお願いします。もともと京大病院に勤務していましたが、2008年より米国ニューヨーク・ファインスタイン医学研究所に留学しまして、このたび2年ぶりに戻りました。専門は多発性筋炎・皮膚筋炎、全身性エリテマトーデス、高安病などの膠原病です。私の外来は病期の長い患者さんが多いですが、全体をよくみて、患者さんの生活を支援する診療をしていきたいです。出身は石川県ですが、京都に移り住んでもう20年と長いです。鴨川を散歩したりからふね屋でお茶を飲んだりするのが好きです。

3 最先端医療シリーズ

下肢切断を回避する可能性を秘めた再生医療　―血管新生療法―

探索医療センター 開発部・心臓血管外科 准教授／丸井（まるい） 晃（あきら）

閉塞性動脈硬化症・バージャー氏病とは？

閉塞性動脈硬化症（へいそくせいどうみゃくこうかしょう）という病気をお聞きになったことがあるでしょうか？動脈硬化が原因で下肢の動脈が狭くなったり、詰まったりして血流が少なくなることが原因で、最初は歩くとすぐに足が疲れたり痛くなったりします。症状がひどくなると常に強い痛みがあったり、皮膚がめくれた状態（潰瘍）になったりする病気です。高齢化社会に伴いますます増加しており、症状が軽い場合は散歩・禁煙などの生活改善で症状が改善しますが、進行すると外科的な血流改善手術を必要としたり、カテーテル治療で狭い血管を広げることが必要となります。しかしさらに病気が進行すると足先から腐り始め、下肢切断でしか救命できないこともあります。しかし命は助かったもののその後の日常生活が非常に制限されます。また自分の免疫機能が自分の血管を攻撃して同様の症状を若い男性が発症するバージャー氏病という病気もあり、これらの患者さんのうち国内で毎年数万人が下肢切断を行っており、従来の治療法の限界が来ていることを示しています。

血管新生療法とは？

最近このような重症の患者さんを助けようとする治療法が盛んに研究されており、従来の外科手術やカテーテル治療とは全く異なり、自分の血管の再生能力を高めて血流改善を促すことから**「血管新生療法」**と呼ばれています。血管新生療法は血流改善を促すタンパク質（血管新生因子）を作り出す遺伝子を用いる**「遺伝子治療」**と、新しい血管に成長する細胞を用いる**「細胞移植治療」**があります。しかしながら遺伝子治療は長期的な安全性が十分に証明されているとはいえず、また細胞移植治療は適切な細胞の種類や、治療手技が複雑であったりコストがかかることが課題となっています。

新しいDDS: ゼラチンハイドロゲル

そこで心臓血管外科では、遺伝子治療や細胞移植治療とは別のアプローチとして、ゼラチンを加工して血管新生因子を効率よく人体に投与できる**「ゼラチンハイドロゲル」**を血管新生療法に応用しました。ゼラチンハイドロゲルは京都大学再生医科学研究所の田畑 泰彦 教授が開発されたもので、血管新生因子を効率よく目的の部位に投与することを可能とします（**ドラッグデリバリーシステム：DDS**）。またゼラチンは食品・化粧品などで幅広く使用されており安全性の面でも臨床応用有利といえます。さらにコスト面でも遺伝子治療や細胞移植治療よりも格段に安く簡便にできるため、そういった意味でも臨床応用にもっとも近い血管新生療法であると考えています。当科では**塩基性線維芽細胞増殖因子(bFGF)**とゼラチンハイドロゲルを組み合わせた血管新生療法を7名の患者さんに行い、疼痛の緩和、歩行距離の改善、潰瘍の消失など治療効果を確認しました。その有望性が評価され、探索医療センター流動プロジェクトに採択され2009年8月より京大病院のバックアップのもとで再始動しました。今回は薬剤部

に治験にも対応するハイレベルな製剤室を設立していただき、さらに2010年３月には**第三項先進医療（高度医療評価制度）**を厚労省より承認取得したことにより、ゼラチンハイドロゲルのような事法未承認の薬剤との保険併用診療が可能となり、患者さんのみならず病院の負担も最小限で臨床試験が行えることになったのは非常な朗報です。2010年９月からは実際に患者さんの登録を行っており、将来的には製品化や保険診療化を目指して尽力しております。

最後にこの紙面をお借りして諸先生方に患者紹介をお願いしたく存じます。対象は安静時疼痛や下肢潰瘍のある閉塞性動脈硬化症・バージャー病の患者さんです。詳細は心臓血管外科ホームページ　http://kyoto-cvs.com/ に記載しておりますが適応基準にあてはまると予想される患者さん、あるいは適応基準判定が難しい患者さんがいらっしゃいましたら大変お手数とは存じますが、まずは下記にご一報いただければ幸いに存じます。当方で最終的な判定を行いたいと思いますので何卒よろしくお願い申し上げます。

ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。

＜ご連絡先＞
京都大学心臓血管外科：担当 丸井 晃・柳 茂樹
心臓血管外科外来受付：075-751-4460/4461
（8時30分～17時）
E-mail: cvs@kuhp.kyoto-u.ac.jp
心臓血管外科ホームページ：
http://kyoto-cvs.com/

bFGF徐放化ゼラチンハイドロゲルによる下肢潰瘍の改善

治療前　**治療1ヶ月後**　**治療3カ月後**

治療後3カ月で広範囲の潰瘍が消失しています

4 院内講演会の紹介

9月21日、「院内感染対策講習会」が開催されました。感染制御部長の一山 智 先生のご挨拶のあと、呼吸器内科の伊藤 穣 先生からは「結核の診断と治療について」、検査部の樋口 武史 先生からは「結核菌の検査について」、感染制御部副部長の高倉 俊二 先生からは「結核の院内感染予防策について」と題して、講演が行われました。

会場の様子

「結核の院内感染予防策について」　感染制御部　副部長／高倉（たかくら） 俊二（しゅんじ）

結核は今なお重要な感染症のひとつで、高齢化や高度医療に伴う免疫力の低下した患者さんが増加するなかでますますその重要性を増しています。今回の講習会ではまず、感染制御部兼任の呼吸器内科医である伊藤 穣 先生から結核の診断・治療について詳しい講義を受けました。結核は感染と発症がまったく異なり、感染しても発症するのは一部であること、感染から発症までは１～２年のことが多いもののいつ発症するかはわからないということ、クォンティフェロンという新しい血液検査が導入されて、かつてよりわかりやすくはなったものの結核に感染したかどうかを正確に診断する方法はないということ、これらが結核という感染症を理解することを難しくしています。そして難しいことが不安につながっているところがあると思います。伊藤先生には結核をどのような患者さんで疑うべきなのか、疑ったときにどのように診断と治療をすすめるかをわかりやすくまとめていただきました。

ついで、細菌検査室の樋口 主任が結核を含む抗酸菌検査についての説明と、検体採取の重要性についての講義を行いました。疑うこと、適切な検体を採ること。結核の診断のために現場の医療者ができることはこの２つだけです。検査の精度を上げるには"良い"喀痰をとらなければなりません。喀痰のつもりで唾液様の分泌液を検査して陰性だったとしたら、たんなる検査費用のムダというだけではなく、その患者さんは結核を発症しているのにみかけ上、結核菌陰性だから発症していない、というとても危険な誤解につながってしまいます。しかしながら、適切な検体採取の方法については、現場教育が不十分なところがあるかもしれません。これについてはまた改めて講習会を開催して解説していく予定です。

最後に私が院内で結核の発症が確認された場合の対策の概略を話しました。結核は空気感染する（気道から排出された菌が空中を長時間漂い、それを吸入して感染する）病原体であることから、結核発症をすみやかに発見することが感染対策の第一歩です。医療従事者は一般の方より結核感染リスクが２倍程度に高いということは知っておかねばなりませんし、医療従事者が結核を発症することが患者さんに与える影響も自覚しておかねばなりません。

結核は有効な治療薬があって、発生数は減少傾向にあるとはいえども、その伝染性、致死性のいずれもまだまだ油断できない感染症です。全職員が医療従事者・関係者として、自らが発症する可能性も含め、どうすれば院内で新たな感染患者が発生することが避けられるかについて、プロとしての自覚と意識を持って、自分にできることを着実に行ってほしいと思います。

10月19日、「院内感染対策講習会」が開催されました。感染制御部長の一山 智 先生からは「国立大学病院における感染管理への取り組みと展望」、感染制御部 副部長の高倉 俊二 先生からは「多剤耐性グラム陰性桿菌の現状と対策」、感染制御部の松島 晶 先生からは「VRE保菌調査について」と題して、講演が行われました。会場である臨床講堂は第一・第二ともに立ち見の職員が出るほど満員となり、職員の意識の高さがうかがわれました。

講演をされる高倉 俊二 先生

「多剤耐性グラム陰性桿菌の現状と対策について」　感染制御部　副部長／高倉（たかくら） 俊二（しゅんじ）

今年夏に関東の大学病院で多剤耐性アシネトバクターの院内感染アウトブレイクが報道され、これに前後して国内のいくつかの大きな病院でこの菌による院内感染が起こっていることも明らかになり、大きな社会問題になりました。このタイプの耐性菌は数年前から欧米を中心に問題視されていたもので、新型インフルエンザと同様に現代社会では病原微生物は、ヒト・モノを介して世界に拡散することが示された形になりました。一方、インドや英国では、健常な方でも発症する尿路感染や胆管炎といった市中感染の原因となる大腸菌やクレブシエラ属などの群の菌種において、メタロβラクタマーゼという抗菌薬を分解する酵素を獲得して多剤耐性化した菌による感染事例が出現・増加していることが報告され、ひそかな脅威となっています。

当院で2004年に体験したメタロβラクタマーゼ産生多

剤耐性緑膿菌のアウトブレイクの時の教訓は、多剤耐性アシネトバクターや新型メタロβラクタマーゼ産生菌の脅威の迫っている今、病院を多剤耐性菌から守るために我々が日常からどのような診療を心がけるべきかを明確に教えてくれます。院内感染対策というと手指衛生や手袋、個室隔離などの伝播予防策ばかりが思いつくかもしれません（もちろんこれが第一の柱です）。しかし、どのような菌でも耐性菌であれば、抗菌薬を必要以上に使用することが増殖を促して院内感染の危険性を増す大きな因子になるのであって、抗菌薬の使用を必要最小限に留める努力は伝播予防策と同じように院内感染予防対策のもう一つの大きな柱であるわけです。

抗菌薬は診療でよく使用する薬剤ですが、どこまでが必要で、どこからが必要以上なのかの明確な線を引くことが難しい場合があります。しかし感染症の適切な診断に基づいているかどうかがその根本であることは間違いありません。「発熱しているから」「炎症反応が高いから」抗菌薬を使用するという使い方は時として必要ですが、そのような使い方は、少なくとも感染症の適切な診断を追求しながらの一時的なものであること、それが必要なほど切迫した全身状態であることの２つの要件を満たしていなければ妥当であるとは言えません。患者さんに対して最も安全な感染症診療を提供するという観点から、10月下旬より特定の広域抗菌薬に対する届出制、許可制の仕組みを更新しました。「今カルバペネムを使いすぎると今後効いてほしい時に耐性で効かなくなるかもしれない」から届出制をするのではありません。すでにカルバペネムの効かない菌が多くの感染症を起こしていますし、カルバペネム耐性のアシネトバクターはいつどのような形で当院に潜入するかもわかりません。現在、世の中に存在する抗菌薬が最大の効果を保ち、耐性菌による感染症発症の危険性が最小な状態に病院を留めておくこと、そのための方策のひとつが届出制、許可制なのです。

感染制御部では私たちの行っている診療の副作用とでもいうべき院内感染が、患者さんにとって最も起こりにくいものになるよう、多角的に方策を進めていきますので、これからもご協力よろしくお願いします。

5 読者より

「京都博愛会病院の紹介」 社会福祉法人 京都博愛会 京都博愛会病院 院長 金（きん） 盛彦（もりひこ）

京都博愛会病院は、京都市街の北部、深泥池の畔に位置しており、病院の周辺は天然記念物の植生を有する深泥池をはじめ四季折々に表情を変える緑深い山々に囲まれて、都会では稀にみる豊かな自然環境に恵まれています。病院の歴史は古く1928年、結核療養所・京都保養院として開設されました。1960年、精神科病棟を併設し、最大規模667床となりました。その後、時代の変遷とともに結核患者は減少して結核病棟は廃止され、先々代の理事長、故 冨田 仁 先生（京大名誉教授）在任の頃より地域のニーズに応じて各一般診療科を整え、急性期から療養型まで対応できる総合的な病院へと転換を果たしました。現在は一般病床150床（うち障害者病床60床、回復期リハビリテーション病床30床）、医療療養型病床54床、精神科病床186床（うち精神科療養病床60床）で総病床数390床となっています。関連施設として同一法人に冨田病院と訪問看護ステーション・はくあい及びディケアセンター・とみたがあり、連携施設として隣接して特別養護老人ホーム・ユーカリの里があります。「博愛・協調・健康」の基本理念のもとにお互いに協力し合って、地域の皆さんに信頼し安心していただけるよう、そして良質な医療を提供できるよう心がけています。

当院でも地域住民の高齢化が急激に進むなかで特に高齢者医療が重点的な課題となっており、急性期から慢性期、そして在宅までを一貫した診療体制で対応できるケアミックスの特長を生かして、近隣の各施設とも綿密に連携をとり、患者さんのニーズにきめ細かく応えられるよう心がけています。今後さらに需要が高まるリハビリテーション部門では、連携パスの整備や365日体制への移行など拡充のための準備を行っているところです。精神科でも、高齢化の進行に伴って増加している認知症や身体疾患合併症の治療に対して積極的に取り組んでいますが、地区医師会のネットワークにも参加してより地域に密着した精神科医療体制を目指しています。

京大病院には、開設当初より大変お世話になっており、当時の結核研究所からも多くの医師を派遣していただいていましたが、現在も大部分の診療科で常勤・非常勤を含めて京大病院の各医局より医師の派遣をお願いしています。また当院での診断や治療が困難な患者さんに対して、いつも迅速かつ適切に対応していただき大変心強く頼りに思っております。今後もさらに連携関係を深め、地域医療に貢献できることを願っております。

6 トピックス

「平成22年度京大関係病院長協議会定例総会」を開催

10月30日に、平成22年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を図るとともに、医学の進歩発達及び病院経営の合理化を企画することを目的として年1回定例総会を開催しているものであり、今年は、学内外から140名余りの参加がありました。

定例総会では、中村 孝志 病院長及び湊 長博 医学研究科長の開会挨拶の後、講演Ⅰとして村井 俊哉 教授（精神科神経科長）より、「京大精神科の現況」について、髙折 晃史 教授（血液・腫瘍内科長）より、「HIV-1感染症／エイズ診療の現状と未来」について講演が行われました。引き続き、講演Ⅱとして、長尾 能雅 准教授（医療安全管理室長）より、「医療安全・京大病院の取り組み」について、菊池 清 先生（島根県立中央病院副院長 医療安全推進室長）より、「感染管理支援システムへの症候群サーベイランスの導入」について、米井 昭智 先生（倉敷中央病院 医療安全管理室担当 GRM）より、「安全研修会の実践」について、村木 千恵 先生（大阪赤十字病院 看護副部長）より、「大阪赤十字病院の医療安全管理の現状」について講演が行われました。

なお、定例総会終了後には懇親会を開催しました。

開会挨拶を行う病院長

講演を行う米井 先生
（倉敷中央病院 医療安全管理室担当 GRM）

京都府警が「振り込め詐欺撲滅の広報活動」を実施

10月20日午前と午後に京都府警による「振り込め詐欺撲滅の広報活動」が実施されました。

京都府下で増加している「警察官等をかたり、キャッシュカードをだまし取る手口のオレオレ詐欺」について、京都府警察本部、川端署及び防犯ボランティアの川端防犯推進委員協議会と川端平安レディースによる、高齢者に重点を置いたチラシ配布が行われ、具体的な手口を説明しつつ個別の防犯指導が行われました。

川端署員から説明を受ける来院者

「平成22年度京都府・京都市国民保護共同実動訓練」に参加

平成22年11月６日に京都市で開催されるAPEC 財務大臣会合を控え、京都府が京都市や国とともに、各関係機関との機能の確認・連携強化を図るため、10月12日に約380機関、約1,000名が参加して国民保護共同実動訓練を京都国際会館周辺において実施し、本院DMATチームも同訓練に参加しました。

訓練は、国際会館において爆破テロ事案及び化学剤散布が続いて発生し、多数の死傷者が発生、さらに国際会館駐車場において爆発物、地下鉄国際会館駅でも爆発物らしきものが発見されたという想定で実施されました。本院DMATチームはトリアージポスト及び重症者救護所に配置され、100名を超える模擬負傷者に対して、トリアージや応急救護の訓練を行いました。２時間に及ぶ実動訓練の中で、各関係機関が連携を確かめ合っていました。

重傷者に対する応急救護訓練の様子

負傷者に対するトリアージ訓練の様子

医療安全に関する講演会「院内蘇生について2～身につけよう、有効な胸骨圧迫とAEDの使い方!～」

医療安全管理活動の一環として、「院内蘇生について2～身につけよう、有効な胸骨圧迫とAEDの使い方！～」と題した講演会が、10月26日に開催されました。講演者は、京都大学・保健管理センター 助教 石見 拓 氏です。

今回の講演会は、2009年４月に開催された医療安全講演会「院内蘇生について～あなたは安心して院内で倒れられますか？～」の応用編として、より実践的な心肺蘇生法を学ぶために開催されました。

講演会では、「シーピーアール（心肺蘇生）トレーニング・ボックス」（あっぱくん）を使用して、胸骨圧迫（心臓マッサージ）とAEDの操作を参加者全員が学びました。

救命措置を必要とするような現場に出会った際、病院職員として的確な対応ができるよう、参加者は熱心に聴き入っていました。会場は、立ち見がでるほど満員となり、心肺蘇生に対する職員の関心の高さがうかがわれました。

会場の様子

「接遇研修会」を実施

11月１日、WLデザインラボ 代表 蒋 麗華 氏をお招きして、接遇研修会「『患者さんの気持ち』への気づきから始まる本物のコミュニケーション技術」を実施しました。

蒋 麗華 氏によると「本物のコミュニケーション」とは、「リアルであること」を言います。患者さんにとって「ここに来てこの時を過ごしてよかったと意味が感じられること」、スタッフにとって「ここで働いてこの患者さんの支援をしていることに意味が感じられること」を言います。

次に、「ワークプレイス・ラーニング」を紹介されました。蒋 麗華 氏によると「ワークプレイス・ラーニング」とは、「顧客が発信しているヒント情報に敏感になり、そうしたヒント情報を吸収し自分の能力、チームの能力を向上させ組織や事業をよりよくしていくという仕事創造技術を言う」とのことです。「ワークプレイス・ラーニングを実践する」とは、「現場で、日常の仕事の流れの中に『顧客からヒント情報をキャッチし自分で考え仕事をつくる』という良質な思考時間を組み込み、それを小さな単位から始めること」と話されました。その後、①「待ち時間が一向に改善されなかった携帯電話販売ショップ」、②「マニュアル運営の限界に直面していたウェディング事業」、③「次から次に販売キャンペーンが投入され、全く準備が追いつかなかったエアラインカウンター」の３つの事例をあげ、具体的に説明をされました。

また、「ワークプレイス・ラーニング」では、「顧客価値」とは、「自分たちが誇りをもって提供したい価値で、その価値を高く評価してくれるお客さまの期待内容とおく」と話され、「顧客の要望をなんでもかんでも聞くことではない」と話されました。「最重要顧客層とその価値の仮設をもって応対することにより、結果としてその他の顧客層の求めていることに臨機応変に対応でき、キャパシティを広げることができる」と話されました。

最後に、「ワークプレイス・ラーニング」をベースにした現場づくり、事業づくりとは、「顧客価値を顧客の視点で再構築するというアプローチである」と話されました。

会場となった臨床第一講堂は、参加者で満員となり、研修会は好評のうちに終了しました。

講演をされる蒋 麗華 氏

院内感染対策講習会「HIV－1／AIDS診療の実際」を開催

11月30日、院内感染対策講習会「HIV－1／AIDS診療の実際」が、臨床第一・臨床第二講堂において開催されました。講演者は、血液・腫瘍内科長の高折 晃史 先生です。高折 先生からは、「①ＨＩＶ－1感染の基礎：ウイルスの一生、自然経過、②診断：ＨＩＶ－1感染症、ＡＩＤＳの診断、③治療、④疫学、⑤感染予防と針刺し後の対応、⑥京大病院の現状：中核拠点病院として」について、講演がなされました。講習会には、多数の職員が参加し、講習を熱心に聴き入っていました。

会場の様子

「ハロウィンの催し」を実施

「ハロウィンの催し」が、10月21日に小児科病棟で開催され、入院中の子どもたちは、色鮮やかなハロウィンの仮装を楽しみました。この催しは、小児科で活動しているボランティアグループ「にこにこトマト」が主催しているもので、2000年から続けられています。

病棟のプレイルームは、カボチャ色の風船で飾られ、虹や森・星空のパネルが置かれた撮影会場となりました。様々な衣装の中から、子どもたちは、かわいいお姫様やとんがり帽子をかぶった魔法使いの衣装などに着替え、写真撮影を楽しみました。

子どもたちの楽しそうな笑顔がたくさん見られました。きっと思い出に残る1日となったことでしょう。

ハロウィンの様子

「クリスマスツリー」と「正月飾り」が登場しました

今年も外来診療棟1階のウェルネスエリアに、財団法人和進会の寄贈による高さ約４メートルのクリスマスツリーが登場しました。サンタクロースや天使、ベルのオーナメントなどでカラフルに彩られたツリーの登場は、人々の目を楽しませてくれたことでしょう。ウェリネスエリアがクリスマスらしい華やかな雰囲気につつまれました。

また、年内には同じく和進会から寄贈の「正月飾り」が飾られました。

「ほっこりクリスマス会」を開催

12月15日、外来棟３階図書コーナー「本の広場－ほっこり－」にて「ほっこりクリスマス会」が開催されました。「本の広場－ほっこり－」は今年で開設10周年を迎えたことから、これまでのイベントの写真展を併せて催しました。

クリスマスツリーやトナカイのぬいぐるみによって華やかに彩られた会場で、マジックや音楽手話、プロのフルーティストhataoさんによるアイリッシュ・フルート演奏を行い、参加された約90名の患者さんが楽しいひとときを過ごしました。イベントの合間には、図書ボランティアの手作りしたクリスマスカードが参加者へ手渡されました。

クリスマス会の様子

平成22年度京大病院臨床懇話会を開催予定

平成22年度京大病院臨床懇話会を、平成23年3月13日（日）15時から芝蘭会館（稲盛ホール）で開催いたします。本懇話会は、地域医療との連携を推進するため、地域で活躍されている医師の先生方と本院診療科長等との意見交換及び本院からの情報提供の場として開催しているものであり、今回で14回目となります。

当日は、新任教授の挨拶・講演及び京大病院報告を行うほか、「急性期における京大病院と在宅医療をつなぐ」というテーマにより講演が行われます。

なお、本懇話会においては、参加資格を医療関係者のみとし、参加には事前申込が必要ですので、総務課総務掛（075-751-3005）までお問い合わせ願います。

平成22年度第1回消防訓練を実施

平成22年度第１回消防訓練を、12月22日（水）15時から実施しました。今回の訓練は、平日昼間、震度６弱の地震発生により積貞棟の建物の一部が損壊し、８階（泌尿器科）で火災が発生したという想定で実施し、教職員34名が参加しました。

重症患者に対する避難活動の様子

訓練終了後、避難場所である積貞棟東側広場において、左京消防署員から講評があり、小西副病院長の挨拶後、同署員の指導のもと消火器の使用訓練を行いました。

左京消防署員の指導による消火器使用訓練の様子

iPad利用で会議をペーパーレス化

12月の執行部会議からモバイル端末iPadを利用して会議を行っています。

会議資料のペーパーレス化により、資料のコピー作業軽減と、コスト削減とともに情報のセキュリティ強化が図られました。

iPadを利用した会議の様子

超音波検査センターがオープンしました

2010年11月８日（月）、外来棟３階に超音波検査センターがオープンしました。超音波センター長 一山 智 先生（検査部長）のもと、各診療科からの多大なご支援により、従来、第一超音波検査室（中央診療棟２階）と第二超音波検査室（外来棟２階）で実施していた超音波検査を一か所に集中させ、超音波検査センターとしての運営が実現しました。センターでは検査部生理検査臨床検査技師、循環器内科・消化器内科・内分泌・代謝内科・放射線科医師および受付事務の方々が協力して、心臓・血管・腹部・甲状腺超音波検査および尿素呼気試験などを実施しています。特殊な検査としては超音波ガイド下でのラジオ波焼灼療法等の治療にも携わっています。先行して超音波画像や検査報告書を一元管理できる情報システムも整備されており、名実ともに超音波検査の診療拠点が生まれたことになります。

今後、他の診療科とも連携させていただき、院内の超音波検査を集約して実施するとともに、これまで以上に共同臨床研究や超音波技術取得を目指す医療スタッフの育成にも積極的に取り組み、日常診療と臨床研究に貢献出来る超音波センターを目指していきます。

（文責：検査部　技師長　田中 美智男）

超音波検査センター

「第5回、第6回アトリウムホール映画上映会」を開催

「アトリウムホール映画上映会」が、９月16日と12月16日に外来診療棟１階アトリウムホールにて、開催されました。この上映会は、入院患者さんを中心に夕食後のひとときを楽しく過ごしていただこうと平成20年12月から企画しているもので、今回で５、６度目の開催となります。

９月の上映作品は、ディズニー・ピクサーのアニメーション映画「カールじいさんの空飛ぶ家」（2009年）。亡き妻エリーとの思い出が詰まった家に静かに暮らしている78歳のカールじいさんでしたが、周囲の再開発でその生活が失われそうになります。そこで、エリーの夢だった南米奥地の秘境を目指し、人生最大の大冒険に出ることを決意し、…という物語です。

上映会には、約120人以上の患者さんらが集まり、感動とともにこころ癒される楽しいひとときとなりました。

会場の様子（「カールじいさんの空飛ぶ家」）

12月の上映作品は、同じくディズニー・ピクサーのアニメーション映画「トイ・ストーリー３」(2010年)。カウボーイ人形のウッディたちが織り成すおもちゃの世界。ご主人であるアンディが大学進学のため家を出ていくことになり、おもちゃたちも自分たちの今後の運命を案じていました。そんなある日、何かの手違いで、凶暴な園児ばかりいる託児施設に寄付されてしまいます。アンディの元へ戻るため、脱出を試みるウッディでしたが…という物語です

220インチの大型スクリーンに映し出される映像と、臨場感あふれる音響に魅了された場内は、およそ110人の患者さんで大いに賑わいました。

会場の様子(「トイ・ストーリー3」)

「ボランティアと病院職員との懇談会」を開催

9月24日、職員食堂「はんなり」にて「ボランティアと病院職員との懇談会」を開催しました。この懇談会は、日々患者さんのために活動されているボランティアの方々に感謝の意を伝え、本院教職員との親睦を図るために毎年実施しているものです。

ボランティア活動には、外来フロア及び各病棟にて患者さんの案内や車いす介助などを行っている外来ボランティア・病棟ボランティア、外来棟３階の図書コーナー「本の広場－ほっこり－」で図書の整理や管理をしている図書ボランティア、積貞棟１階のがん情報コーナーで活動しているがん情報コーナーボランティア、小児科病棟で入院中の子どもたちに楽しい時間を提供するボランティアグループ「にこにこトマト」があります。今年度は132名の方がボランティア登録をされ活動しています。

懇談会に先立って行われた表彰式では、一定時間数活動されたボランティア11名のうち、出席された４名の方に三嶋 副病院長より感謝状が贈られました。また、任 看護部長の音頭で始まった懇談会は、ボランティアの方々と本院教職員がこれまでの活動経過や今後の計画などを語らい、ボランティア活動に関する意見交換を行うなど、和やかな雰囲気の中で行われました。

表彰式の様子

7 名物職員紹介

呼吸器外科／陳(ちん) 豊史(とよふみ) 助教

呼吸器外科の陳 豊史 先生を紹介いたします。

カナダ・トロントで数多くの臨床肺移植診療を経て、現在当科スタッフとして活躍中です。特に京大肺移植プログラムのコアメンバーとして重要な役割を担っています。

豊富な知識、抜群のフットワークと「馬力」で仕事を進める姿は、「いつ寝ているんだ？」と少し心配になりますが、そこは自慢の体力と食欲でカバーしているようです。学生時代はバレー部で活躍されたそうですが、今や貫禄のためイメージするのはやや困難。食欲といえば、研修医時代の陳 先生を焼肉に誘い、自分の財布の中身が瞬時に寒くなったことを思い出します。

明るい性格で院内の人脈も広く、他診療科との連携も持ち前の押しの強さでスムーズに進め、当科の大きな力となっています。「先生お願いしますよ、ガハハ」と(無茶な？)依頼を受けた他科の先生も数知れずいらっしゃるのではないでしょうか。

それも患者さんを思うがため。診療は親身に丁寧、診察室からは患者さんと明るくやりとりする声が聞こえてきて、信頼の厚さが感じられます。そんな呼吸器外科の頼れる逸材、陳 先生をよろしくお願いします。

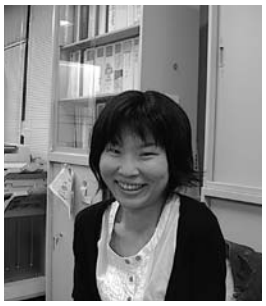
紹介者／呼吸器外科 助教 庄司 剛

感染制御部／長尾（ながお） 美紀（みき） 助教

感染制御部の長尾 美紀 先生をご紹介いたします。呼吸器内科医を経て、現在感染制御のエキスパートとして邁進されています。長尾 先生は、明るく気さくで姉ご肌、感染制御に関するたくさんの知識や経験をお持ちで、私を含めた感染制御部のみんなから頼りにされ慕われています。安全管理室の長尾 先生の奥様であるうえ、お二人のお子さんのお母さんで、公私ともに大忙しだと思うのですが、診療、研究、論文の執筆と日々頑張っておられます。いつ寝ているのだろうかと不思議に思うこともありますが、きっと時間を有効に活用できる技術をお持ちなのだと思います。プライベートは、その容姿に似合わず、食べるの大好き肉食女子で、食事の際は、「肉、肉、がっつりいこう」と叫んでおられ、日々の力はここにあるのだと納得です。みなさん一緒に食事に行って、長尾 先生からパワーをもらいませんか。

感染制御部／看護師長　井川 順子

総合臨床教育・研修センター／田中（たなか） 菜生（なお） 事務補佐員



院内で働く研修医にとっては誰よりも知名度の高い事務補佐員の田中 菜生さんを紹介致します。総合臨床教育・研修センターでは、研修医に関わる事柄だけでなく、職員の教育・研修、外部からの実習生受け入れ等、多岐にわたる業務を担っていますが、彼女は卓越した記憶力でかけがえのない戦力として大活躍しています。講習会での準備物は配置も含めて全て暗記。研修医は応募の段階から全員の顔と名前だけでなく出身大学まで覚えています。初対面にも関わらず姓名で話しかけられ驚いた先生も多いのでは？ いつも笑顔で明るく、時々和ませてくれるような発言があるのも大きな魅力で、彼女の休暇中はセンター内の雰囲気が淋しくなってしまうほど。そんな彼女は最近院内から大文字山を見ることが好きだとか。仕事の疲れを癒して、また研修医のために頑張ろう、と決意を新たにしているとのこと。皆さんも彼女に名前を覚えてもらうために是非センターにいらして下さい。

紹介者／総合臨床教育・研修センター 特定助教 南 麻弥

8 栄誉

「上本 教授が平成22年度の厚生労働大臣感謝状を授与されました!」

肝胆膵・移植外科の上本 伸二 教授が永年の移植医療の普及・向上に努力し、臓器移植対策の推進に貢献した功績により「臓器移植対策推進功労者厚生労働大臣感謝状」を授与され、10月15日に病院長室において授与式が行われました。

中村 病院長から感謝状を授与される上本 伸二 教授

9 各科・部からのメッセージ

「オーラルケアマネージメント」

歯科口腔外科外来では、各科からのご紹介をいただき入院・外来を問わず患者さんのオーラルケアが行える指導を担当しています。

初期の目的は、口腔内環境の改善、歯原性感染の予防からはじまりますが、口腔清掃状態が良好になることで誤嚥性肺炎、人工呼吸器性肺炎の予防や糖尿病、高血圧の病態改善、終末期の諸症状からの開放に有用であるとの報告も散見されるようになってきました。さらに、摂食機能の回復、維持も重要で経口摂食による水分栄養補給、体力向上は病態管理、治療の面ではプラスになるのではないでしょうか。そして、何よりも「おいしく食べられる」ことが、患者さんの楽しみとなり、生きる意欲を鼓舞し、疾患治療に積極性をもたせ、早期の離床、入院期間の短縮や円滑な社会復帰へつながると考えます。オーラルケアマネージメントはこういった一連の流れを歯科医師、歯科衛生士だけではなく医師、薬剤師、看護師、栄養士などといった病院のスタッフが協働して行い、患者さんのＱＯＬ向上につなげることを最終目的としています。

オーラルケアは単に口腔清掃指導など一通りではなく、予後不良歯の抜歯を必要としたり、齲蝕の治療や義歯修理・作製などを治療計画に含めなければ、よりよい口腔内環境は維持できず、まさに包括的な歯科治療の実践といえます。

もちろん罹患している疾病や患者背景は千差万別であり、各個人に合わせたキメ細やかな対応が必要です。こうした口腔機能の維持は、生涯をかけてなされるべきであり、退院や転院、終診などで途切れることがないよう、患者さんのかかりつけ歯科医院や地域歯科医師会との連携は大切です。また、院内でも多種多様な患者さんのためのチームが編成されていますが、院内に口腔衛生管理や摂食可能な口腔機能維持を主眼とするようなオーラルマネージメントチームがあっても良いかと考え、人員確保を含めたシステム作りに現在も努力しております。院内各所よりのご理解・ご協力を賜りたく本紙面をお借りしてお願い申し上げます。

（文責：歯科口腔外科　外来医長　後藤 和久）

「シミュレータ説明会」　- 総合臨床教育・研修センター –

当センターでは、シミュレータの貸出業務を行っています。医療の安全を担保するためにはシミュレータを使用したoff the jobトレーニング（職場を離れて研修を行うこと）が必要と言われています。今年度からシミュレータの活用促進に向け、シミュレータ説明会を開催しています。第１回目は、オープンホスピタルでも好評だった京都科学のフィジコを取り上げ実施しました。今後も順次開催しますので、是非ご参加ください。また、シミュレーション研修に関する相談業務も行っていますので、気軽にご相談ください。

（文責：総合臨床教育・研修センター　助教　内藤 知佐子）

シミュレータ説明会

今後の予定　12月20日現在

＜院内職員向け＞	1月11日（火）17:15～	院内感染対策講習会（臨床第一講堂・臨床第二講堂）
	1月12日（水）17:15～	医療安全に関する講演会（臨床第一講堂・臨床第二講堂）
	1月18日（火）9:30～	医療監視
	1月25日（火）17:15～	院内感染対策講習会（臨床第一講堂・臨床第二講堂）
	2月10日（木）17:15～	院内感染対策講習会（臨床第一講堂・臨床第二講堂）
＜患者さん向け＞	2月17日（木）19:00～	第７回外来アトリウムホール映画上映会＜上映作品：佐賀のがばいばあちゃん＞